論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※ 甲 第 号

氏　　名　　奥田　浩司

論 文 題 目

大正デモクラシーにおける抵抗文化の形成についての研究
――天皇制イデオロギーと知識人の亀裂――

論文審査担当者

主査　名古屋大学　教授　坪井秀人

委員　名古屋大学　教授　羽賀祥二

委員　名古屋大学　准教授　日比嘉高

委員　横浜市立大学　教授　山田俊治

論文審査の結果の要旨

［本論文の概要］

大正デモクラシーを規定する民本主義の思想を構築した吉野作造、それに吉野の思想に随伴しながらも、吉野との亀裂を拡げていった作家有島武郎、そして吉野と関わりながら帝国日本の植民地支配に対する批判を発信していくことになる朝鮮人留学生たち。本論文はこの三者を取り上げながら、民本主義という思想の問題性を天皇制に対する三者の認識の差異を描きながら論じ、特に有島や朝鮮人留学生らの思想の中に抵抗文化への通路を読み取ろうとすることを目的としている。論文全体は全四部 12 章から構成され、序章・終章に加えて巻末資料七種を付す。このうち３篇は学術雑誌掲載の審査付き論文である。

第Ⅰ部では有島武郎と大逆事件の関わりについて考察を行い、第１章では、白樺派における有島の位置について、「絵画の約束論争」を手がかりに論究している。第２章では有島の「かんかん虫」を取り上げ、大逆事件との関係について、幸徳秋水の総同盟罷工論などを媒介に議論を進めている。第３章では武者小路実篤の小説「幸福な家族」が戦争の時代にあってなぜ大衆読者を獲得していったのかを、母性イデオロギーの問題として論じている。

第Ⅱ部では有島武郎の「或る女のグリンプス」の成立に婦人解放問題がどのように関わっているかを論じている。第４章では「或る女のグリンプス」について、『白樺』初出のテクストから筑摩版全集収録のテクストとの比較から、作品論が中心化する研究史動向をも踏まえながら、全集版では作中の大逆事件との関わりが見えにくくなっていることを批判的に検証している。第５章・第６章では、「或る女のグリンプス」の同時代性について、坪内逍遥が提起した「新しい女」に関わる問題と相関づけられるとともに、作品における〈母性〉と婦人解放問題の関わりについて議論を進めている。

第Ⅲ部では、有島の『或る女』と母性保護論争の関わりを取り上げ、第７章では有島と家族との関係に見られる思想を『青鞜』や婦人解放問題との接点から探り、第８章では、『或る女』が母性保護論争との関わりについて、『青鞜』や婦人解放の思想が『或る女』にどのように反映しているかを論証している。

第Ⅳ部では、朝鮮語雑誌『現代』の調査と分析にもとづき、吉野作造の思想の再検討と彼と関わりを持った朝鮮人留学生らの思想的動向についての掘り起こしを図っている。第９章では、森本厚吉が主宰した雑誌『文化生活』における吉野作造の批評を取り上げ、有島の思想とも比較しながら彼の政治思想に天皇制を支持する性格が強かったことが指摘されている。第 10 章では、『現代』の概要を明らかにし、朝鮮基督青年会所属の朝鮮人留学生らによる記事を詳細に分析している。第 11 章では『現代』に掲載された卞熙瑢の「民本主義の精神的意義」等に見られる翻訳の思想的可能性について論じている。第 12 章では同誌の植民地主義への抵抗の可能性について金俊淵・関泰瑗らの思想を吉野や柳宗悦らと比較しながら考察している。

論文審査の結果の要旨

［本論文の評価］

吉野作造の唱道した民本主義を中心とする大正デモクラシーに関わる議論については、旧来の単純な民主主義思想としての評価を批判的に見直す再検討が進んでいるが、本論文の目的も吉野作造に対する批判的な問い直しを、吉野と彼が主宰した黎明会の身近にいた人々の言論や創作の分析を通して行うことである。本論文は特に大逆事件・韓国併合の時代的意義を重視して対象とする期間を 1910 年から普選運動が高調する 1920 年前後までの時代に絞り、上記のような方法によって民主主義と天皇制を両立させた吉野の思想の二面性を浮かび上がらせ、大正デモクラシーの思想に天皇制と植民地主義が内在する矛盾を解明しようとする意欲的な研究である。

本論文の最大の特徴は吉野作造を中央に据えてその両翼に有島武郎と朝鮮人留学生という性格の異なった言説の担い手を配置して、三者の差異を一次資料の調査をもとに検討していく手法にある。思想史研究を基底とするこの手法によって、特に前半で中心的に取り上げられている有島武郎については、その作品「かんかん虫」「或る女のグリンプス」他を大逆事件への反応や、坪内逍遥の提起した「新しい女」や母性保護論争など、女性解放運動をめぐる議論と接続させ、従来の文学研究がカヴァーしきれなかった種々の課題に取り組む新しい有島武郎研究が可能となったと言える。同時に大正デモクラシーを思想研究の枠組みに収まらない文学や芸術（『現代』誌に寄稿した作曲家洪蘭坡についても調査されている）を包含した領域で捉え返し得ている。

朝鮮語雑誌『現代』を発掘し分析した第Ⅳ部において朝鮮人留学生の視点から吉野の『文化生活』掲載の評論や柳宗悦らの思想を相対化するという戦略的方法も秀逸である。先端的思想に関わる言説や情報が集積する東アジアの思想的ハブとしての東京に集った朝鮮人留学生らの言論を整理し、無政府主義と天皇制、あるいは朝鮮独立と天皇の下での〈一視同仁〉的平等を矛盾なく肯定する吉野の二重基準的思想の陥穽を見事に浮彫にしていると評価出来る。

本論文は有島のイプセン・ノートや卞熙瑢の「民本主義の精神的意義」が参照している英語文献や朝鮮語総督府の発行文書や植民地統治史料など少なからぬ朝鮮語文献などを丁寧に読み解く作業を行っており、例えば「民本主義の精神的意義」については、卞が参照した Lyman Abott の論考が翻訳過程でどのように戦略的に置換されたのかを分析し、《翻訳をめぐる文化的な闘争》の相にまで批評を届かせることに成功している。こうした資料博捜は巻末の朝鮮語文献の紹介と翻訳にも活かされている。

もっとも有島と武者小路に関しては文学テクストの読解が不十分であること、天皇制という重い主題をテクスト分析の結論に安易に導入している点など、改善が求められる点がいくつか指摘しうるが、それらは本論文の価値を大きく損なうものではない。

以上により、審査委員一同、本論文が博士（文学）の学位を授与するのにふさわしいものと判断した。